

かけだしの頃



30代の頃
現場の仲間との1枚
(正面左が佐藤氏)

笹島建設株式会社
関東支店 副支店長

佐藤 正彦

1978(昭和53)年に笹島建設株式会社に入社。以来、現場一筋で現職にいたる。座右の銘は「有言実行」。



今だから話せる
ゲンバの失敗



失敗ですか? やっぱりね、長くこの仕事をやっていきますと、それは忘れられない思い出っていうのはありますよ。あれは、まだ現場所長の駆け出しの頃ですか。ある工事で立坑が水に埋まってしまったという、今でも信じられないような経験があります。その現場では、横穴を掘削するために、当時としては国内で最深ともいえる七〇mくらいの立坑を掘り、そこに一台数億円というシールド機を入れる段取りになっていました。その事故が起きたときは、ちょうど盆休みの直前で、立坑にシールド機を無事に下ろし、「これで休み明けにはすぐに掘れるな」という状態にして、盆休みに入ろうとしたわけです。帰宅途中のことですよ。どうしてか、フツと現場のほうを振り返ったんですね。すると、現場のほうに大きな雷雲が発生したみたいで、その空はもう真っ暗。嫌な予感にとらわれつつ自宅に着いてみると、案の定現場が大変ことになっている」と切迫した電話がかかってきました。それで、大慌てで現場に駆けつけてみると、なんと七〇mの深さはある立坑が五〇mくらい水で埋まっていた。それを見たときは、なす術もなく果然と立ちつくしていたことを覚えています。もちろん、通常の雨に備えて立坑の周囲を高さ二〇cmくらいの縁石で囲い、普通であれば問題なく対処できるよう手は打っていました。ところが、あの日に発生した雷雲というのは、それこそ何十年

に一回あるかというもので、驚異的な集中豪雨により、たかだか数時間で現場の長い努力の結晶である立坑を、一時的にせよ台無しにしてしまったのです。無論、いまの私であれば、現場の状況は歩いてでも確認して、その高低などを入念に調べ対策をしますが、それもこれも当時の経験があったればこそそのことで、あの頃は「まさかそんなことが起きるとは」としか考えていませんでした。ですから、今の若い人たちには、新しい現場に着いたら、まずは現場の状況を歩いて確かめることを強く勧めたいですね。現実の問題として、われわれ請負業は、発注者から「ここを掘れ」と言われれば、その場所を掘るしかない。「ここは水の通り道だから」といって掘る場所を変えてもらうことはできないわけですね。現場を足で把握し、場合によっては「ここにも排水溝をつくったほうが」などというように、積極的に逆提案を行って現場を守っていくしかない。土木という仕事は、自然を相手に真直面から向き合わねばなりません。自然はときに途方もない力を発揮するだけに、準備しすぎてしすぎることは決してない。常識的に「そんなことはありえない」と考えるより、「ありえないことでも起こりうる」ことを前提に現場に臨んでいく。つまり、土木屋は自然を侮らず、いい意味で臆病であることも必要だ、というのが、私が若い人たちに伝えたいことのひとつなのです。